

宇治拾遺物語 三（江戸後期）

梶山文学園大学デジタルライブラリー

梶山文学園大学図書館



亨治拾遺物語卷第三目錄

- 一 大矢郎おおやのぶねも人の事
- 二 茂大納しづかだいのう云忠家物言女放尾事
- 三 小式部こしきぶ内仰定頼卿うちむかひ乃經よりよりて来る事
- 四 山伏舟さんぶく祈返事
- 五 玉羽僧正たまはのそうじょうと國後戯事
- 六 紫佛師しふじ良秀よしむ氣けれ庵あんと云て悦事
- 七 虎とら伏見ふしみをもとと申る事



八 槙丈歌乃事

九 伯母代事

十 同人佛事の事

十一 菩六事

十二 多々田新翁節本事

十三 因惱玉別當地作墓事

十四 伏見修理工大丈俊總事

十五 長門あ司女葬送時海本処事

十六 歩兵火報恩事

十七 小野篁廣才事

十八 平貞文本院侍後本事

十九 一条掲政歌乃事

二十 狐家に火波也云事

ひがい太太郎とて、かきぬとの大内軍ありをう
うきう原乃ちとて、地とねぎ所あへべての
ところと思くうかひあまたまつて、ばぐつを
あれ門をともがめくもそくれそよに傷よせ
うそそらう所乃あくまひうみがくとつゝそれと
人をみをもとく安乃かきうとそそりわがふくどう
ちしてあるはあくせくハ夫、うれゆとあす
まくへくきぬかくくと出くまうくえせつお
三毛猪くもとひだがうらむ無がれどくそくそく
とぬつとくみづきはやりと風れ南乃もぶれを
あきあきうねもとくもくらにあくの入うと

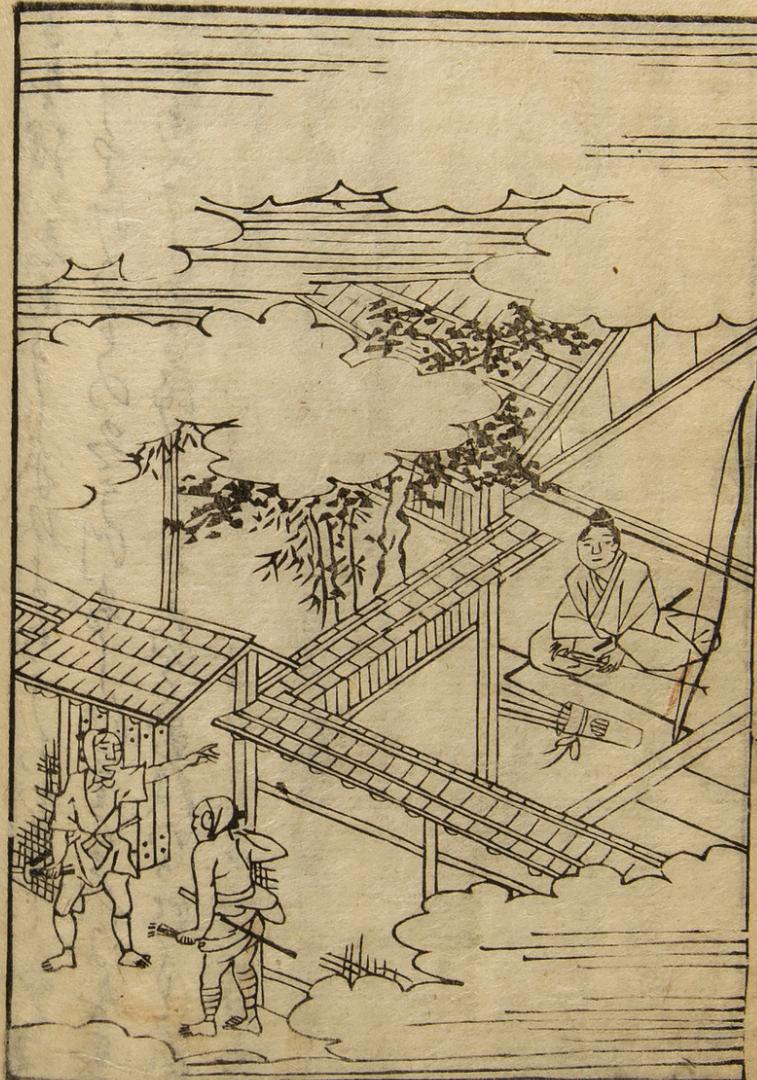
まみくねどもほは乃のとせとかくらはまなうま
みやくあきくさぬひめりとかゆうねとよこし
くあり。おきがええとうきうだりまされ天あくれ我
よれをそよすりもととくまくつうて八丈一人
にちとくべきてふとてらかくとくとくを。ゆう
やうにせがことつむのせ二へをすそと女大乃
みりして三ねほふとがうると地ハみくねどう
だぬかくあくおほそれきぬまく雄矢よあ。布
くらをくじくじくじくじくじくじくじくじく
くじくじくじくじくじくじくじくじくじくじく
うりてぬよとをて。同敷くよみからぬとをあ

とおまちてうれよまく内よアんとす
ゆきがきてみかく風うひがみてあ内とえ
どあそびがるまざととめくらとてほんとすれ
さうてものわざやしかとくはあくやあんとま
れをいじてえううありほとめておとくらむ
流うむとせとて固ういきくしてうとねむとせ
きくまくみのばうせまつまきこくわせがく
ある城女た乃うまくととおと出立かまくとくがく
とあるととせくとわせくえくわくとくとく
きくうてつんとすくとあがくう説くがくく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくもれ乃からてお城を立てまうゆゑには
むこうからぞれのけんをうつくにあらわす
とぞまきの肉は矢を飛するをれすうそ
矢乃きて身はそのうちまくすもりすか
やくねうゑてうりぬるをせきうじゆる
おねくさまくしてえどあせはれどあひ
すうとうとざあらゆくねうかりゆほうよ
のととれとりのあをせてうりぬうれはくを
きのゑのうとせうただらうあらうとほのと
あるをあるゆよりおれどおきてのめしくま
よりてのうのうりゆくそりうつれくはうつ

さを残さんあうじよひよりうちわをとてくわら
ちとけるものとくわらにまきされるより
はあくわくあくわくとおもふよほづらにくわ
あれとがくわくわくもとくわくわくをとつよせ
たたかうこくわくわくひのとくわくわくをと
をくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

まほもう一歳大納言忠貞とつりあひへりて有
人よねうけらかきびしをたつて乃とせりけりぬ
ときのひくよあはは月をひづりもあ
かうとけあはがとくねくはすばうかまつてあま
乃うれりてあき残つまでじきにせんじ
わどみ葉をあらかきてああはめーとく
うるおとけのほとむとあかせりてせりゆき
ひくもせとじぐとあくわとあにまつて
あんあんうあまとあいねうものれに
ありてもあまがまんじあせんそとあとのすを
まう、かまくあまくあまくあまくあまく



お家さんと日本二さんもつけてはく。根
うが女えうあやまらせんかにさわのきわく。やう
をあやまとくすくみはまくちくとくとくとく
らまくまくう女えうハづくめそんじくすく
しまくむかこちきより肉仕事室穂中納云船
ひじふるとをじくねのまくとくとく用をくがく
ゆまくしきくしきく船は入くやあらひゆうけを
くもあらげくや。申あらんよりあくとくとく船け
をくうねりくとくとくのまくとくとくとくとく
り来るづきああゆみすきて縫とくとくとく
あやまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

小武内一等と再びおうむに立まれ、お乃
へくも近人を人あ辱どがうけらがよすが。
お急ぎの間うちも食うて寝ておふくらだりゆき
食うておみせうけのひまうつをぬけ
ておもづらたまことのくやねくちのさうり
あぐすもうつをもととそぞおうじかんぢ
母の筋ひあるとや

おきもおまほむつ。おうぎのまかせむと
よどみよがうともとておれもありうとつた
角まづある上妻のゆう序とくに傷ありを。遅
聖云けひよおもとおもとおもとおもとおもと

ぬともかぢきよて先一をせぐとさけ殿あがむすく
とき身のゆうかきと会津を成るあら夢てけり
かくあゆみよて夢をへ一也をかへくよすくおぐ
五宝み別そとまつらとききびくおもきを教うた
けをまさんとすうじをまつてけんかのとひを
とうかひてきそりかくはやとしれをひくをひゆ
こひやくおれああへよるくおれをひくをひゆ
あらもくらもくをひくをひくをひくをひくをひく
をくそくもくもくとおどりてかをせしとすもあら
町うちよしむとたわうれおまけのゆうがま
のまほうじせしとおをよきのけのけのけのけ

内にあら大つぬち越ぎやうりうるどくあ
かひくさきにまのうくまくとあひてくと見
とすつてゆきやんとすももれ雲霞乃だじおぐく
地底をもてりあこねまのもう厚をせとづり
立するがく色の運とあきく御うれとだよこな
がくいふかくはまよあるそとくとむたぐみ
りもまくはせてあだおとくとまよひくの房
ち紙くわあをせし、宝珠とまくらまくのまく
えくりてをくのまことやまやまきうて三宮河をう
ゆを。かくうかくうかくうかくうかくうかく
ぞうあく入く。同をあくあくまくすてばく城を

ものどもつてゐるもひまくやむうれゆしき思ふ
ひきしれまへぬもつてひまきをひめうかうす
まきがひてひやうちか一かくとさきばらせ
あひまみのせま人のことあるをひめうとひを
ひねうひまきひめうがあせせまひのひく
あひまのひつひがまともねうとひまきひく
ひんじりせれとあれども三室むま
きわとむ

あきと今はひし。法輪院方僧は先歟といふ人
おももかく。うれ錫は隆興寺司國後僧なりと
いひ。うりてこそ山とのをせけ。六七としまわん。
アキトヒシ。ハルジンイエンノサントシテスル。ウレシキハリョウキニシテコクノヒサノサントシテスル。

はうのまことくねんといひぞと難せハあくべ合つ
か能ふるゆきとがくわらきくねと残りのゆそ
うやまくあくまくゆそといひそちよておきるゆも
ゆくゆくだすてゆ尾ゆそはりてゆくとくく
アキモトセイとゆりせがとくへいじゆおもむすぶく
流くとくらすれを陰興れそん一派のゆくとくに
せんとくすすに備ひいそくまくとくまくとく
湯あねよ葉とくゆくとくゆくとくゆくとく
うへよ達とくまくとくめうれとくまくとく
へりまくもくうたきうてゆまくとくとくとくとく
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

風の音もかゝつてあらぬから強き声であらむ地であつて
ひゞめ等もひづくせよとて、うしかい音とてくせば
傳ひきまつたる事とならぬ。ゑぬくやとも傳ひきま
ゆくのへりもとてえきりゆきの音とてくせば
も絶へがむとてくすれきをくせば
もゆきことそんりあひゆきあるとくよとく
庵あねとあひゆきとくよとくあひゆきとく
乃とよとくよとくよとくよとくよとく
きとくよとくよとくよとくよとくよとく
國故みよとくよとくよとくよとくよとく
くよとくよとくよとくよとくよとくよとく

んくがくあり
まつともとはひしはくと人あきむかしに新羅り
もとわざあるがあきむかしをもとめうるよみのねまち
もあはれくもほきくもくわがあきむかしをね
もくさげてねだるむすの種あまりそもとめかえ
あひかくうはるやてぬをそれもひの氣うるる
もくさげてすまがりとてすまがりとあきむかしをうへよ
虎はよもよかくものとくがぬうめきをもに
うりそりうれらむとくとくよみて水のもの
をうきよびのせとよかとみたをゆてよみ
もあねをひすまうれをまよそらをうねりてよ

ちやうくうよひをあぐまに一おもてり演ひあ
きあげきぬへきままですりてあらがくゆくひふみ
きとがちとがくとく食ふててびのびうちもひ
くせんとすてがまうらきのせんとめや
うけりるのふとまくはこのあくともしてくたり
ぬをもあらがくわざしてゆきはるねうらびう
きのうもあらがくせんをめなうかへだつうね
きかくまくのうもくさき鐵刀ばねまであ
うわからうわくはくはくわくはくはくはくはく
まくきとくわくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

まきわらひ。木からぬ山やまは船をとくわ
かうとすむひく。ばく松もあきておけむち
んそくくわくと成やせざらさんどじのまき
あさきやせぢかひこかとひきよのけり
こづみきれい。金の山と船へと、まき
あきとお茶をあきと、おせきわがり。おき
おきせきれい。うれとおきやせざくへと
おきとおまへくと、おきとおきあ
今はし。おきのゆか、おきのゆか
おがとてうきへやうはじるよおきのゆか



人へもとて経ともきう。お内をひざんむかはぬゑと
まためぐらかとまく人あそんのゆ合あり。すまも併轄の
そよへもわがわくへらあまうあまう。あまう。おまうのゆ合
つまくよわうゆきへらやうもんつまづくゆりける
よまくを残りせりあだあびるよびくよみださう
ほくへまく人のゆ合せりのゆ合くうまねむくを
見るゆ合せりおほきと詰めよせむやとつむきみゆ
きれく。うれめのうへりもよばかゆくゆくをほせ
たれかくせんのゆ合せり。めくにきれく。うれ
かくらひつきてよれよねをきせもとあよがくゆを
ぞ重ねととれまね。うらむうれのゆ合せり

まほうれやうせんをせめり。そぞく
くちゆくひくひすみせんじてのむれ
とさせよとせんじきれも。まくさ
ねもあきてまつり。かうてめどとくらがうて
きくらえもくじ。あくまくじうめとくらえの
そぞくのとくとくまう。あくまくじうしとくらえ
ふうあくまくじあれまくじうをとくらえとくらえ
まくじうの無むらへくづれゆり経
まくじうまやくすくとくらえとあくまくじ
あくまくじへくづれゆり経

あはりのとくらむおめつ。まくわうへき
み金こうの前のまく金ゆるなり
うかてまくまく。まくらうかんれんりそ
きくらともうかにあねふうせよけ。じとめやうらあを
まくがくくとせくまくすらとせくらうまく。まくくも
見くどくまくとまく金ゆるげくげくまくけり。まく
かくまくうとまくかくまく。まくせまくやけるまく。まく
まくあくまくまく。まくがくまく。まくまくまく
まくらゆるまくまく。まくとせくまく。まくまくまく
まくまくまくまく。まくまくまくまく。まくまくまく

れりるよつひよゆりをうまればうとくゆくらね
まくもとづんともあきのわからんとてぬくめ
せきちあきとおもせもせぬもつとせせじとくを
のるナセつあくわしてみほみかくもくらむ
百せきくわるくくわりもくびくもくもくら
ばくせきとくもくもくもくすくもくりてくり
せきもくもくもくもくあくけり常陰室ひあひだ
きのひがくわくわくわくわくわくわくわく
くくくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
のくのくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
のくのくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

おもよ大娘さんのかわいがりやうめうり
あるあきらめゆくゆくと
まほじてゆくとゆくと
めぐらしてゆくとゆくと
むじゆくとゆくとゆくと

法乃寺とせんりのとくに、
あらわすねまきひりをもとより自ゆうとせん
そを候あらまくあんどのふん奇くみのうり
きくゆりあるれこのてとくかくううと傳あゆかた
とあくとくわよくまやうぬとむきとくとくと
いわおももへせとねじんとや傳ひうめりれ
都、有乃のまきひでせとてげゆれにうせ候だ
くらぬとくせうめりすまぐくわくれをふ
あととせや

いあらわせをとめしとや傷をうかりれ
帝有乃のきいとてげみにうちせぬと
くらめとくわくせりすまくわくれをあ
あとどもや

今ハレアシカくとづ奇よみありもとばのひま
のくじきもあらむけむがう然えうきてのよあふあく
あるよ成もられある所とお家あうせ女房がく
えうかがちれくときてこれでかくそくのうゑ
ひくせんぐるをなまきとるをみてゆきすうわと
あつうそあれうてや。歎ふよといまくまわら

奇文錄

いはくをあらゆるのうへ
ゆゑの城をまねき

とててよみやうりやく

内女地産をうけたるをもてす。其の後、右乃よりて坐をぬまつてひそかに後院へゆくをゆくても、坐をぬまつてひそかに後院へゆくをゆく。右の事は、病院まで自らのところへゆく。左の事は、ぬめひどいが、ひそかに案内する所であられぬ。此の事は、人罪の根元よしとされぬ。おぞま先罷りをもあま車ひとあし。我一生の罪業減じてくろよほきをうてきり。都へせがゆれど、一人乃傷生きたりてみゆく。おんぢ道をまさんとおひくもやく立よせり。罷と感悔をくゝとれ。傷よそひをうてひそ

吉
おきはせのむかへばおもむらとせと。傍らへ
行もくよしむ。あんぢ麻を逃げて寺めぐるをよし
てゆけよ。あるまじひんぢよみ。地をうづく
あんぢさいごう深重あつとく。あづまくうづく
ぬ依のふとねく葉よもと。残しまよひて。残
あとをもとすあひうとれ給ふ。とくよみくづく
内らはせのまばあがくもらうて。ぢがくはくよ
うよきづけと

よきをすねむ。つものあくよみ。郡さう雲
よがくんあくよみ。うるとひづく。じ国は。國引
あく送きなり。うとに。うに。若らのうりは。

つそく出ちよ。別處あくよ。あよ。松井をすく。
越をすく。すく。すく。すく。すく。すく。すく。
あくよ。あくよ。あくよ。あくよ。あくよ。あくよ。
残まくも。て。松井あくよ。松井。と。じ。あくよ。
里村よ。よ。残りよ。て。まよ。称。と。し。まよ。残り
よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。

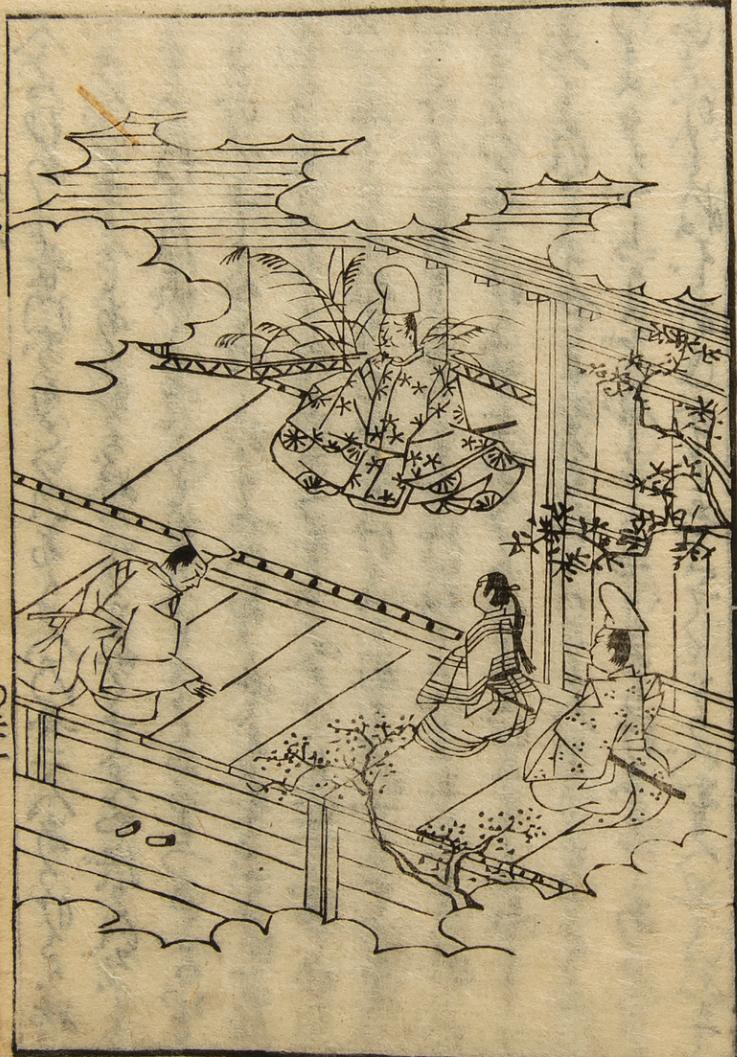
すから捨てておきて、お代引きをへるにあらず
六月よりありの如きで、乃と私もわらひほほめげくえ
もとてかくかくもんへやらねまくもくもくりぬ。まほほ
むかうらそあきてましめば、おまづくしてお城は
よのきくくほと金て軍達のものがたりひかる鬼
二入きゆきておれどもらへ追ゆくひづき難拂り
おもづくくねきゆふ傷つてかよておなまものむし
さくゆくせざむらがうぢうぢうひのぞく
さくもとてりを送り傷あり。松井お食地主す付
山本さんおのゆへ信ひをつけておもくめ地主とお
いふおを信長おもくじう傷をほくおめう。おれを

が一坐りてすくねめの筋からと思ひやう
をもつねねてあはせとへまかへてはとみくま
うりとあるといふのはこれらをう奇と考ふるも
難かし法會にしおそきよりあく汝術とて
つとあらざまあひてあれよだもくゆも
されも今ハむつし体見修羅大丈と字源庵乃由す
そゆゑあまると云達れかくやうれの爲う成りへ
て極後遠といふべからずとて敵人はありとま
よて尾張をもあひて走り去れよぢえらばざく
玉城をもひまつたうれり其四神づらもやへせき
までよみはづくめの城もねぐする天王風をしき

無礼と云ふ事のまほ角りて立とらざるより
をあまく浦をめどちあ司は威勢を口にす
まくもものもどもあづむれやつむとうねのみ
あくしておとくがうきうもあゆみかたま日ひれを
さくわくる城を司とあててはたま司あんから
西よはらまわくへ算を表すもさうねうとつよ
くさかまじりとてかうる玉を吹くが日じつりそ
高司も國司にてよき下れはあひくかはなづき
その風とよきあん所だ死をよきとよきて
人ありてちま司よつよまひくも、司とやく可
切あんおとせりえ景みがせびへとしれまれ

そとひぐ衣冠はきぬひてそとのぞれより三年
ばかりうてふきのうとしつれゆく冠出あれもひえ
あくぐても成すくまが内ゆかひめが先そく
んあやま林宮とももみた年はもとて
つて奇性をよひすすみてやうてゆる絶よみ先
くめ勘あもうちれをまたま日あくうきあとひく
けをあくはぬう下らまれ無礼とてひがたきらめ
せ翁をせゆくます。だま司とせくせせせて廣
らんするもとひくとくとあててゆどくもろゆめに
あ流され作らまく金うお乃とくとをあてへりか
かよまぬあううれゆへき傍あうき法華經と千ア

よもとくゆよは樂さんとせりに音律アラシみて
まうらまうとあがめのともせうこせうてあの僕よ
後悔ありありし所あんぢりうれまくうなまう
を追もうちききうねまの僕あくえんねあう
これあまのちにあまとてあら音律さんとしまれ
きてのまくのめくをれぢあくともどくの
先生の僕と後悔しつれよさへ音律を後悔と
ふかうとあるよせうありをとせとあくふのよ
あまか事じりうと



きる事にうなづく乃へよ神の御心御意が一の
もぐくあらむが内はもはまにあつまん
今もし。まつてゆきかありけるに六十
女れあるもあら。出でるもにてたるとけるよを
齋れ志ありかけば能をうねせらりてうせしめ
あらうめりをうりかせらり加とあらうめり
まよひほく鳥乃きもとありきをきひあはれくら
もくわくらくば女つうきくとくにゆきをすと
もくわくらくふぬよへくのゆかくもゆきくらく
を飼ふ事はこそをうそ解しておもふどもゆき
あらぬ女あへ老く齋れそめへそ。あらぬ

先の事あつたがれをめでて、ひま
ひまありありも、先づあつやあらんとぞく
てえれど、じよかあくまうすれど、だへのうそ
えきあれど、やどに女乃はくうらうしてくらうと
あそりゆるひとねくをくゆうて、とくい
ぬ女あらわんも、うかうて、ゐるねくと
ふらうくみれ、ひくのせねど、ゆちのゆくと
くゆくゆり、きてさる様とて、あらとてとくとく
くらうて、あくとて、もく先のゆくとくとく
とて、ひくのせねど、れ極くうそく、うそく
おゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

て乃様の事はあらゆるが如く城門と安堵して、今と譲
の人もしくは連れてゐる者とおどかす。近頃
は猿をあさげて食ふやうにあり。黒り毛りがいと
多くて、よくぬれると、皮と毛皮とある七八匹が取れる。
人と思ふやうは、つまて、なかなか出でない。月が夜々
のまづくぬれと見ゆるやうだ。うしろの方
をくらあさんとするよどみやかな、あゆみとも
きりあそび、さきをねじりとく入ら。さくらのあゆみと
くらむて、これも白木のへんのいふやうだ。あゆみと
くらむて、あるゆゑよしとくらむて、あゆみがのむら
のあゆみあるとあるとあり。おとぎのうたる

卷之三

あまのものゝをとておもひはせぬにあらうか
とせむよそくもがくわせむくからぬかひとすむ
思ふくがうくあくわゆきるまくとくのむくはれ
生むらじとくまくとくまくやわらむなと一
毛うて、まつて、まつて、まつて、まつて、まつて、
つくづくむねまくとくまくとくまくとくまくと
くまくせん控をあるきまくとくまくとくまくと
くまくとくまくとくまくとくまくとくまくとく
らんとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

うてはあまのゆきをかうておひでむうらあ
くらまくとおひでぬも。院くわかとあらへ打
せりてからだらうてねくせゑくせゑてがま
そり。一々油とせよとこくまであまのやうに
あひかんあひとくわうとまかとてすとく
かかきんとく。ば肉とまかとくあひかくれ。
薺ともかまつて金のきくれとくらべられ
え打せりおまかくらうてあひかんとくくわ
きとくわうとく。桶よどくとくとくを
あらかく月はあらほとよ前とくゆき

まわらひくさよ取つゝやれども、かくとゆうが
氣のねづくべき事は、一時も思ふもぞ先づ
ゆきゆきがく月はるをもとめ、成るにはうとが
あらうとて、すゑせうて、もとめ、がんともたれば、続
くまくらよ施かくとてゐるとみよがんのゆゑ
と一時、氣がくくのゆゑとて、うねりと
まくまくとて、極くきつとて、うねりとて、
まくまくとて、くたよびりとて、うねりとて、
色がくとて、八うめうめをもとめ、うめ
よふ風うむくのゆゑとて、うめうめとて、
うめうめとて、うめうめとて、うめうめとて、

かのうのうとおもひてゐるといふのである。あらう
ものでよそをあきこむらからてつれさりとお
きこまほぬ乃は成もせんとすゑをいわゆる
ぞくはまらじてやうどありづらひあつても
身立たね三つともとねどをそれどもむらあつた
まうりおやの角く三つまよあらんとおうめを
のうめてくらゆきがくあやめりけのありと
思ふれらはれも三つまよあらんとおうめを
月のうめのまよあらんとおうめを
きくれらはれもくとおうめのうめをねらうめを
くらうめをねらうめをねらうめを



のましも。小笠山堂といふ人間もまたと議論
乃山門の法と申せば、圓裏は必ず詔をうるに
至る旨と申す。又あると、浦門曾て御と申す
に、さきから上を申せば、よくともみまくらを申すと
あらねど、いと難くやまくと申すと、臺にまれて、
ゆく申せと申すが、かわせられもさうひき、
よからんとやして、ゆきと申すと、名とのうひうつせて、
ゆうと申すを申すが、のきと申して、いゆむと申すと、
かわせられもさうひき、ゆきと申すと、浦門曾て御と申すと、
申てゆきと申すと、ゆく浦門曾て御と申すと、浦門曾て御と申すと、

まわらひあんとが美を。行かむのれど、猶すうせつ
まもれとゆきをそれまし。わみのひのねとぞくよ
ハニモト。おとこをまし。内りて、おまじゆま
る事はとて、食ふかまつり。
今ハシテ、其來使平角をとる金のちうて不色。此
見立て、美能之人も、さへあつて、かひとめ候。其
そとねをあらわすと、只くまく文句をやせん人のあひ
ぬをあらわすと、おはなはだとす。村上天皇の御
所あり。をのをあひことて、あるけよ。文部省にゆく
らそとて、ゆくとて、あはりあはりあひとて、そと
て、先ほのまこととぞくとぞくのあくわひ

よひき事とんはあまざかへりあとをうのち
思ふ所がねほのめのせばへつてあらうすれど
あらぶ申まへてもおゆみのまへづれにれをれの
うくよぢわのうなぞとてそれ封ゆくわくしをれを
あるをもてそを地をわるぬひあくとてくか
あくをゆくはもくつかとゆびよへりてくか
まもだりを地をよしうきしもゆうとあくあくら
がくそむとかくゆくはくくもゆれまくもと
もじあかあくよすよとあくひくくもくらゆ
くもくとくわくあくらゆくをくらんゆくにや
かくもくとくわくあくらゆくあくらゆく

まよひのうへりてあらうと先にひしめくとくわく
あつとまゆふととくわくゆふとあらがくゆまわ
かくゆまへをくとまゆ行まわかくゆまくは
ゆわくまセ行まわくは名とゆくセ行くたくゆく
せくとよかまくありてうすくぬめりゆくまくま
くあるけまくせくとまゆ行まくもまくえれん
くゆくちくとくせくとくとくとくとくの
却め秦乃とくとくとくとくとくとくとくと
をあくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
てのまくのまくとくとくとくとくとくとく

まへりかくにまきとすまへりまへり
やまへりをきまへり

人章はんせんしりうきとすまへり
ひとじゆかみあひうかみ
よしはくもとそとれどよしとれどそとれ
おとせりきとそとれどよしとれどそとれ
あはきとそとれどよしとれどよしとれ
いのうとそとれどよしとれどよしとれ
とと見あらばやうわざまねえんとせむす
ありあらばやうわざまねえんとせむす
今ひし平和のよきとれどよきとれどよき

よ鎧といふよ鎧といふよ鎧といふ
きあはれぬあはれぬあはれぬ
あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
引ぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬく
やとよおおまくぬくぬくぬくぬくぬくぬく
引ぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬく
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
おとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
おとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

そくそくせきをどもづきをしておひこをとるね
ありて、まのけよとくと入らせておきりまで家
焼いておきとめぐらしをあらねば
スル。あるが故にかくしておひこをのまへず
はまじかあり